下院議員に当選したトルドーは、まもなくレスター・ピアソン首相の政務担当補佐官に任ぜられる。一九六七年に法務大臣になったトルドーは、早速友人に電話し、省内の裏表を知るためにこれから一日二十四時間働くつもりだ、と熱っぽく語ったという。

事実、トルドーの活動は目覚ましく、在任中に離婚法を根本的に改めたほか、刑法を改正して妊娠中絶や同性愛、宝くじ、酒気探知器を合法化するという、当事としてはきわめて大胆な措置をとった。その頃のトルドーは、「国家は国民の寝室には一切踏み込まない」という有名なコメントを残している。

これらの措置により、若々しくて独身、金持ちで独創的、知的で胸にいつも一輪のバラをさし、サンダルをはいて議事堂に入るこの型破りの法務大臣は、全国的に名前が知れわたる。六七年十二月にピアソン首相が辞任を表明したとき、人気度からいってトルドー氏の右に出る者はいなかった。

憲法移管が実現して自由党▶議員の祝福を受けるトルドー首相。

トルドー氏は翌年四月の党大会で党首に選ばれ、四日後、ピアソン首相の辞任を受けて二十代目の首相に就任した。そしてその三日後、議会を解散し、六月に総選挙を実施することになった。

英仏両語を公用語に

選挙は全国的なトルドー旋風（トルドーマニア）に乗った自由党が、下院二百六十四議席のうち百五十五議席を制して、地すべり的勝利をおさめた。トルドー首相の登場は、国民に新しい時代の開幕を印象づけた。

政権についたトルドー首相は、若い頃からの懸案をひとつ実行した。二言語政策である。トルドーの伝記を書いたリチャード・グインが言うように、トルドーにとって二言語政策は初代首相マクドナルドにとっての大陸横断鉄道のようなものであった。つまり国家統一の道具である。

国家統一のためには、フランス系カナダ人が国内どこにいてもくつろげるようにしなければならない。

一九六九年に制定された公用語法によって、連邦政府機関における業務が英仏両語で行なわれるようになり、またフランス語を話す連邦政府公務員の数も、フランス系住民の割合（全体の二七パーセント）に応じて増員された。

トルドーは、フランス系住民が自らの言葉を話す権利を、言語や信教の自由と並ぶ人権だと考えた。トルドーの政治哲学は、公正と自由、秩序が三本柱になっている。無政府状態の存するところに自由はない、というのが彼の信念である。

一九七〇年十月、ケベック解放戦線（FLQ）が英国の外交官ジェームズ・クロスを誘拐し、州政府の閣僚ピエール・ラポートを殺害したとき、トルドーが平和時としては初めて戦時措置法を発動し、軍隊を動員するという強行手段に訴えたのは、そのためであった。

一九七二年十月、トルドーは二度目の選挙を実施する。しかしその時は、失業や経済問題のせいで、自由党は百九議席と過半数を割ってしまう。その後の十八か月は、新民主党と手を組んで政権を維持せざるを得なくなった。

その間、トルドー政府は、問題になっていた失業保険制度の運用を厳格にし、インフレ鎮圧のため食料価格審議委員会を設置し、あるいは家族手当や老齢年金を引き上げ、プライバシー保護法を制定し、また石油公社ペトロ・カナダを設立したりしている。

新民主党が進歩保守党と組んで、予算案を否決したため、七四年七月に三度目の選挙が行なわれることになった。

しかし今度は国民が、インフレ対策を中心とするトルドー政権の経済政策を支持し、結果は自由党の圧勝に終わった。

ところがインフレはその後も高率で続き、失業者も増える一方。とうとうトルドーは、選挙戦で反対した賃金物価抑制